

菅又厚美作 「GOOD-BYE 落ちこぼれ」

- (効果音) (目覚ましベルの音)
栗原友子 うるさいなあ、もう。(パチッと時計を止める)(あくび)朝からイヤな予感。わあ、やっぱり水曜日だ。ヤだなあ、塾。今日は休もうかな。一日ぐらい。でも…。一日休むと1週間分遅れちゃうからなあ。取り残されたらヤだなあ。あーあ…。
- ナレーション 学校に行く前から、もう悩み始めているのは、青春中学3年生の栗原友子。スポーツならなんでもこなす、活発な女の子。ただし、学校の勉強のほうはあまり得意ではないようです。去年から通い始めた塾にも、飽きてきた今日このごろ――。
- (効果音) (教室のガヤ)
女子 A おはよ、友子。3時間目の英語のテスト、自信ある？
友子 ええ?! テストだっけ? 抜き打ち?
女子 A 違うわよ。前から言われてたじゃん。知らなかったの?
友子 知らないよー。ウソー。みんな知ってんのかなあ。
女子 A 当たり前でしょ。3年の2学期にもなって、テストを忘れるなんて、友子らしいというか、なんというか…。
友子 ずるいよー。みんな黙っててー。あたし、何もやってないよー。あーん、死にたい。
- ナレーション それでなくても苦手の英語、突然のテストができるわけがありません。案の定、友子は放課後の職員室に呼ばれて――。
- 先生 栗原、お前、どういうことだ、このテストは?
友子 すいません。
先生 「すみません」じゃ済まんぞ。「これは、受験のための志望校を決める大切なテストだ」と言ってあったはずだぞ。今回の偏差値によって、どのランクの高校を受けるか決めるんだ。栗原の希望しているところは、最低でも、偏差値35はないと難しいんだからな。この分だと、ここはちょっと危ないかも…。((FO)
- 友子(モノローグ) (かぶせて)「偏差値 偏差値」って何よ。どうせあたしはできないよ。だけど、なんで1回の実力テストだけで行き先が決まっちゃうの? こんな紙っ切れ一枚で決めつけないでよ!
- ナレーション 先生の話に心の中で反抗しながらも、ほとんど真っ白の答案を前にしては、返す言葉もないとも子でした。その日は、思い足取りで塾に向かったのですが…。
- (効果音) (塾のガヤ)
友子 あーあ、今日はサイテー。そもそもさ、日本人の友子さんは、英語なんかでき

なくてもいいのだよ。

小林百合子

(クスクス笑い)栗原さんて、まるでできないのを自慢してるみたい。

友子

(モノローグ)小林百合子。自分が頭いいからって、イヤな感じ。

何よ。小林さんには関係ないでしょ。それに、今日はテストだってこと、忘れてたんだから仕方がな…。

百合子

(さえぎって)や一だ、あっきた。受験生のくせに、テスト忘れるなんて信じらんない。

友子

何よ…。

佐々木健二

さあ、授業始まるぞ。席着け。

友子

あ、新しい先生？

佐々木

そうだ。今日から、お前らを教える佐々木健二だ。よろしく。えー、年齢は二十ウン歳。独身。教育モットーは“一生懸命”。何か質問あるか？

友子

はい。先生、あたしたち、どうしてたった1回のテストの偏差値で、決めつけられなくちゃいけないんですか？ できる子はいいかもしれないけど、あたしらみたいな落ちこぼれはつらいです。

佐々木

うん、いい質問だな。同じように思ってるやつ、いるか？

生徒

(口々に)「はい」「おれも」etc.

佐々木

そうか。よし、それは大切なことだからな。授業の前に少し話そう。

百合子

先生！ 話よりも授業始めてください。時間がもったいないです。

百合子

何よ、その言い方。

百合子

だって、あたしたち、勉強教えてもらうために月謝払ってるんだから。それに、栗原さんみたいに、程度の低い高校行く人はいいいけど、あたしは時間がないんです。

友子

程度が低くて悪かったわねえ！

佐々木

やめろ、二人とも。お前、名前は？

百合子

あたし？ 小林百合子です。

佐々木

小林百合子、これだけは言っとく。10分や15分、人の話を聞いたからって、遅れちまうようなのは、本当の実力じゃないぞ。本気で勉強したけりゃ、いくらでも補修してやる。

今、お前らが必死になって上げようとしている“偏差値”ってやつ、これは成績を計る一つのデータに過ぎないんだ。全体の中で、自分の学力がどのくらいなのか、つまり、できるほうか、平均程度か、それともビリから数えたほうが早いかってことを示すわけだな。つまり、いくら頑張ってもいい点出しても、ほかのやつらができれば、偏差値は上がらんということだ。だからみんな、他人と自分を絶えず比べてしまうという仕掛けだ。

百合子

だって、しょうがないです。他人よりいい点取らなきゃ、受験に勝てないんだか

ら。

佐々木 “勝つ”？ “受験に勝つ”って、どういうことだ？ 志望校に受かることか？

百合子 そうです。

佐々木 いいか。ただ単に学校の成績がいいとか、勉強だけが人間の価値を決めるんじゃないぞ。おれはお前らに、頭でっかちの、いい子ちゃんになってほしくない。

友子 さっすがあ。そうだよな。

佐々木 こら、チャカすな。えっと…。

友子 栗原友子です。

佐々木 栗原か。よし、分かったな？ それでは授業に入る。

友子(モノローグ) “佐々木”っていったけ。あの先生、話分かるじゃん。そうだよ。テストが悪いだけで、今まで、ほんと、バカ扱いされて頭きてたけど、できるからって、いい人間とは限らないもんね。小林のやつ、ザマあ見ろ。

生徒たち (塾放課後)「さようなら」佐々木「お、気をつけて帰れよ」「さよなら、先生」「バイバイ」etc.

友子 佐々木せんせ。

佐々木 よ、栗原。どうした？

友子 うん、あたしさ、さっき、スーツとしちゃった。だつてさ、先生、あたしが今まで思ってたこと、言ってくれたんだもん。

佐々木 そうか、スーツとしたか。じゃこれで、スカッと勉強できるな。

友子 えー、そりゃないよ。

佐々木 なんだ、まだなんかあるのか？

友子 そうじゃないけど、だつてさ、さっき先生、「勉強だけがすべてじゃない」って言ったでしょ。(一気にまくし立てる)あたしなんか、頭悪いからどうせやってもできないし。あ、体育なら自信あるよ。でも普通の勉強はダメ。学校の先生なんてさ、「このクラスには、高校行けなさそうなやつが 2、3 人いるな」って、あたしの顔チラッと見ながら言うんだよ。ひどいでしょ。だけど、あたし、もう気にしないんだ。今日の佐々木先生の話聞いて安心したもんね。——あれ、どうしたんですか、ヘンな顔して？

佐々木 栗原、お前、何か勘違いしてんじゃないか？(怖い声で)ちょっとこっち来い。

(効果音) (教室のドアが開く音)

佐々木 そこ、座れ。

友子 なんですか、急に怖い顔して？

佐々木 栗原、お前、さっき、「頭悪いからどうせやってもできない」って言ったな？

友子 はい。

佐々木 「勉強できなくても、気にしない」とも言ったな？

友子 だって、ほんとに…。

佐々木 (どなる) 甘ったれるのもいい加減にしろ！ お前、一度でも、頭が痛くなるくらい真剣に勉強したことあるのか？ 一つの問題解くために、何時間も粘ったことあるのか？ やってみもしないで、「できっこない」とはなんだ、「できっこない」とは！ 小林みたいに成績ばかり気にしているのも情けないが、お前のように、始めっから何もしないで逃げてるようなやつは、おれは大っ嫌いだ！

友子 (メソメソしながら) あたしだって、好きで落ちこぼれてるわけじゃない。本当は分かりたいんです。学校の授業中なんて、先生の言うこと、チンプンカンプンで、50分も座ってボーっとしてるの、つらいんです。でも先生は、頭っから“バカ”って目で見るし、そしたら開き直るっきゃないじゃない。

佐々木 だったら、その悔しさをバネにして、やってみろよ。本気出してみろよ。栗原、本当に受験に勝つてのはな、他人に勝つことじゃないぞ。自分に勝つことなんだ。“怠けたい”“逃げたい”っていう自分の弱さに勝つことなんだ。もし本当に、自分の限界に挑戦して、一生懸命やったんだったら、たとえ落ちこちたとしても、決して負けじゃないんだ。さわやかな勝利感が残るはずなんだ。それをおれは、ある人から身をもって教えられたんだ。

友子 ある人から？

佐々木 ああ。あれはおれが高校2年の時だったな。

(音楽) (ブリッジ)

そのころおれは、思うように成績が伸びなくて、スランプだったんだ。自分の勉強がうまくいかないのを、環境のせいにしてたり、先生の教え方が悪いとか、他人のせいにして甘ったれていたんだ。その時、おれの家庭教師だった大学生に、思いっきり殴られたんだよな。その人は言ったんだ。「だれがお願いして、お前に勉強していただいてるわけじゃない。自分が好きでやってるんじゃないか。好きなだけ勉強できるってことを、感謝しろ」ってね。おれ、その時、ガーンと来て、目が覚めたって感じだった。“おれには健康な体があって、勉強できる自由な時間があって、親に学校行かしてもらってる。これで、まだ人のせいにしてるようなら、おれは負け犬だ”ってね。

友子 ふーん。先生も…。それで、その家庭教師の大学生の人は？ 今は学校の先生になったんですか？

佐々木 いや…。亡くなったよ、3年前に。彼は先天性の病気があってね。「二十歳までは生きられない」って言われたらしい。でも、自分の精一杯のところまで挑戦して、不自由な体で大学にも入って。彼はクリスチャンだったんだ。だから、いつも「神様に与えられた命を大切にしたい。与えられた能力を、無駄にしちゃダメだ」って言ってた。そして、「この不自由な体をも感謝してる」とも。(声を詰まらせて)英語が好きで、中学校の教壇に立つのが彼の夢だったんだ。

ナレーション　　そう言って、肩を震わせる佐々木先生の顔を見ながら、友子は、“この先生の、そして、その胸に今も生き続けている、その青年の真実を、しっかり受け止めたい”と思ったのです。

<完>